

## 調査報告

## 宮城歴史資料保全ネットワークの歴史資料レスキュー活動に参加して

## ―東日本大震災被災地の現状と歴史資料レスキュー―

鬼 嶋 淳

## はじめに

私は、二〇一一年一月二五日～二八日まで、科学研究費補助金基盤研究（S）「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」（研究代表者・奥村弘）研究グループによるフォーラム「東日本大震災における歴史資料保全活動をふまえた地域歴史資料学の中間提示をめざして」、およびNPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク事務局（東北大学川内キャンパス文科系合同研究棟 一階）での歴史資料レスキュー活動に参加した。ここでは、フォーラム後に見学した宮城県石巻地域の現状と東北大学での歴史資料レスキュー作業について報告する。

## 被災地の現状―宮城県石巻市南浜町・門脇地区

一月下旬にしては暖かな一月二七日、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク（以下、宮城資料ネットと略す）の平川新氏らの案内でフォーラム参加者とともに宮城県石巻市を訪れた。石巻市は、今回の東日本大震災により、宮城県下で最大の被害を受けた地域である。日和山から周辺地域を眺めたのち、南浜町・門脇地区の一部を歩いた。

まず私は、日和山から眼前にひろがる光景に、言葉を失った。青空の下、ポツンポツンと残る建物。海岸沿いには、自動車が堤防のように積み上げられ、日和山の麓には、大量の墓石が倒壊している【写真1】。東側の河口付近には瓦礫の山がみえ【写真2】、西側にある製紙工場からは、モクモクと白い煙が立ち上っていた【写真3】。

三月一日、多くの人が駆け上がって避難したであろう階段を下りて、南浜町・門脇地区へ向かった。ここでも驚くべき光景を目にする。墓石がある列まで山側に倒れているのである。ここまで強烈な津波が到達したのであろう。また、付近にある石垣の隙間には白い屑が詰まっていた。聞くところによると、津波当日、周辺の製紙工場からパルプの屑が流れだし、こうして被災地の広範囲に残っているとのことであった。

すでに夏には、瓦礫の撤去がほぼ完了したと盛んに報道されていたが、本当はどうなのか。たしかに、瓦礫は道路から撤去されていた。被災した製紙工場も一部復旧し青空に白煙をあげている。しかし、それぞれの家を見れば、問題はほとんど解決されていない【同写真3】。津波の被害と同時に火災が発生した門脇小学校も無残な姿のままである【写真4】。現在でも、寺社の入り口に設置された棚には、アルバムやトロフィーが持ち寄られ、この地での生活の痕跡が集められている【写真5】。

## 本間家の土蔵保存運動

こうした復旧過程のなかで、勇気づけられる貴重な運動があった。本間家の土蔵保存運動である。

今回、御当主からお話をうかがい、土蔵を見学させていただく機会があった【写真6】。本間家は、江戸時代は千石船の船主として活躍し、明治期以降は味噌醬油醸造業などを営んでいた武山家の流れを継いだ家であり、震災前には日和山の麓に住宅二棟、土蔵二棟、倉庫などを所有する大きな屋敷を構えていた。だが、今回の津波被害で、土蔵一棟を残し、すべてが倒壊、流出してしまった。

四月初旬、土蔵の二階に保管されていた古文書類のレスキュー作業が、宮城資料ネットにより行われた。一階天井まで浸水したものの、二階部分には海水が少し入っただけで、古文書類は難を逃れた。ただし、御当主は、土蔵については倒壊の危険もあるだろうから撤去する予定にしていたそうである。しかし、その後、宮城資料ネットの依頼をうけた一級建築士を中心とした建築チームが応急処置と調査を行った結果、漆喰、海鼠壁の補修は必要であるものの、柱・梁の軸組（基本構造）に損傷はないことが判明した。それを聞いた御当主は、自衛隊による瓦礫撤去にあわせての取り壊しを見合わせ、自ら、土蔵の床板をあげて床下の汚泥（パルプ屑）を掻き出し風を入れて、保全活動に取り組みはじめた。震災の記憶を残し、地域の復旧のシンボルとして、地域の歴史を一〇〇年以上見続けてきた土蔵を保全する試みである（以上、本間家の土蔵保存運動の経過については、斎藤善之「石巻市・門脇地区での資料レスキューを実施」『宮城資料ネット・ニュース』一〇三号、二

〇一一年四月一五日、および、斎藤善之「東日本大震災 石巻市門脇・本間家の被災土蔵をめぐる」『宮城資料ネット・ニュース』一一八号、二〇一一年五月五日を参照）。

被災状況、保存運動の経過をお聞きして印象に残ったことは、御当主が土蔵の解体から保存へと心を動かしていった点である。大きな被害をうけているなかで、簡単な判断ではなかったと思われる。御当主や地域の協力者の土蔵に対する愛着が、修復が可能であれば土蔵を解体するのではなく、復旧の拠点にしよう、地域での生活を再建していく象徴にしようという思いへとつながっていったのであろう。被災地の復興のあり方を示唆する貴重な心の動きであると思う【写真7・8】。

## 水損史料の保全作業

一月二五日、二八日の二日間という短い間であったが、東北大学にある宮城資料ネット事務局にて、津波により海水に浸かった史料（水損史料）を保全するためにクリーニング作業を行った。

水損史料といっても汚損程度によって対応が分かれている。汚損程度が激しい場合、例えば、カビが生えていたり、腐敗が始まっているような状態の史料については、「真空凍結乾燥法」で対処する。これは、水損史料を一旦マイナス三〇度程度で凍結させ、その後真空凍結乾燥機で直接水分を気化させ乾燥させる方法である。通常この機材は、遺跡で発掘された木製品などを乾燥させるために利用される。宮城資料ネットは、この乾燥機を所有する東北芸術工科大学文化財保存修復センター、奈良文化財研究所の協力を得て資料レスキューを進めている（佐藤大介「奈良への旅―津波被災資料の凍結乾燥処理」『宮城資料ネット・ニュース』一四七号、二〇一一年八月二二日）。

汚損程度が軽い場合、例えば一枚史料、開くことができるような冊子史料の場合、洗浄と乾燥作業で対処する。今回、私がクリーニング作業を行ったのは、この汚損程度が軽い史料である。

宮城資料ネットのある東北大学川内キャンパス文科系研究棟一一階には、四月以降の資料レスキューにより、クリーニング作業を要する史料が段ボール等に入れられて大量に運搬されていた【写真9】。史料はすでに乾燥していたが、土などの汚れのほかに海水に浸るとカビが発生する可能性があるので、史料を洗浄し、再度乾燥させるクリーニング作業が必要であった。

今回、私は全国各地の大学院生、教員、学芸員、仙台市民合わせて一〇数名のボランティアの人たちとともに、宮城資料ネット事務局員やこれまで水損史料のレスキュー作業に携わってきた人たちの指導のもと、東京文書救援隊による被災資料洗浄システム「東文救システム」という方法で史料のクリーニング作業を行った【写真11】（天野真志「東日本大震災事務局における水損資料保全活動」『宮城資料ネット・ニュース』一四五号、二〇一一年八月一六日）。

ここで具体的に作業手順を追ってみたい。

①ケースに水（湯）をはり、発泡スチロール製のボードを浮かべその上に網をのせる【写真12】。

②網の上に史料をのせ、さらに網をのせる。史料を網で挟んだ状態で水に浸す【写真13・14】。

③網に挟んだ状態のまま、ハケなどで泥汚れと塩分を落としていく【写真15】。

④吸水タオル（セームタオル）で吸水する【写真16】。

⑤網をはがし、史料を不織布で挟む【写真17】。

⑥段ボールの上の濾紙に不織布で挟んだ史料をのせ、濾紙で挟む【写真18・19】。

⑦段ボール―濾紙―不織布―史料―不織布―濾紙―段ボールと重ねた状態のまま扇風機で乾燥させる。史料の厚さによって異なるがだいたい二〜三時間【写真20】。

⑧乾燥した史料を中性紙の封筒にいれ、番号をつけて整理をする。

このように「東文救システム」は、史料に直接触れないで洗浄作業を行うことができるため、史料を傷めにくい。さらに、比較的単純な作業であることから、未経験の人でも参加できるという特徴がある。

私が担当した史料は、陸前高田市の千葉家文書のうち、明治から昭和にかけての証書類であった。明治期のものは水に浸してハケで汚れを落とし、比較的しっかりとっているのだが、大正末から昭和になると、印字などがにじむ可能性があり、また文書は非常に破れやすい状態であった。史料を水に浸すという、これまで歴史資料を扱ってきたときには考えられなかった作業することに戸惑いがあった。そのため、洗浄には大変神経を使ったが、事務局員や水損史料のレスキュー作業に携わってきた人たちが、これまでの経験・知識・技能をもとに、丁寧に指導してくださり、さらに現場の雰囲気も大変和やかで、安心して作業を続けることができた。

一日が終わり、片付けを手伝いながら作業の成果を確認した。初めてで不慣れなこともあるが、クリーニングできた史料はそれほど多くなかった。クリーニング作業にかかる膨大な時間と労力、さらには、現場での資

料レスキュー作業を思うとき、取り組みの継続性について改めて考えさせられた。

## おわりに

資料レスキュー作業に参加して感じたことは、第一に、中長期的な取り組みの必要性である。クリーニング作業にかかる時間と労力は膨大であるし、今後建物の建て替えが増えていけば、さらにレスキューを必要とする資料が増えてくるからである。

第二に、災害以前からの日常的な取り組み、地域の博物館・資料館、行政（文化財担当の関係者）、史料所蔵者間のネットワークの重要性である。津波被災史料や情報を宮城資料ネット事務局に集めることができたのは、二〇〇三年七月の宮城県北部連続地震を契機に発足して以来の日常的な活動を通じたネットワークによるところが大きかったであろう。

第三に、多様な分野の研究者（例えば、歴史、民俗、美術工芸、建築など）、行政、市民が協力して歴史資料レスキューに関わることの重要性である。そのためには、地域の歴史資料、歴史文化が有する意義を広めていくことが大事であろう。レスキュー作業に参加していた仙台市民のうち、仙台市博物館の友の会に所属する方々は、毎週資料レスキューのボランティアに参加しているそうである。

東北から離れた地域で暮らしているが、今後もできる限り、東日本大震災の被災地での資料レスキュー活動に参加したいと思う。と同時に、今回の作業を通じて、これから佐賀でどのような歴史資料保全活動ができるかを問われていると感じた。佐賀の地でも少しずつ取り組んでいきたい。

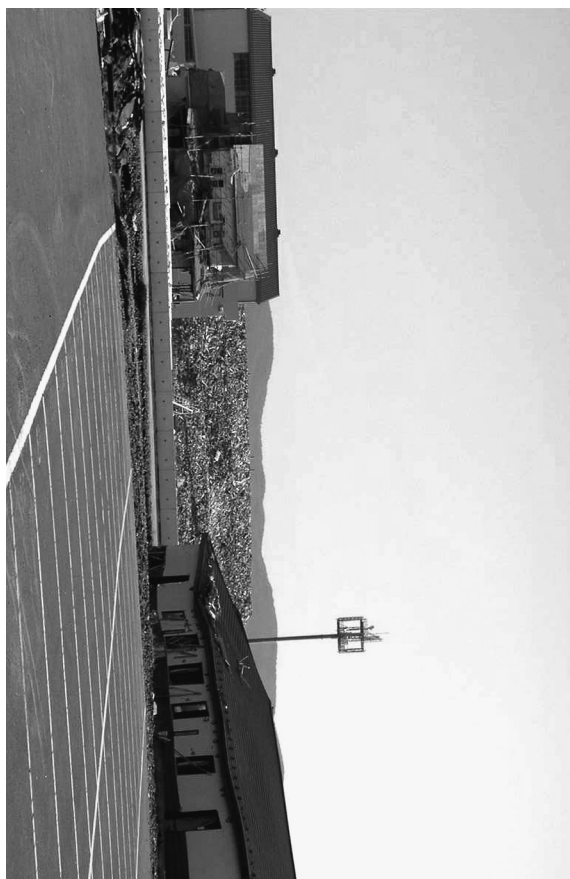
**【付記1】** 宮城資料ネット関係者による以下の報告・論文が、東日本大震災発生から今日までの歴史資料レスキュー作業現場の雰囲気の詳細に伝えている。『宮城資料ネット・ニュース』（[http://www.niyagi-shiryounet.org/03/news/2011/2011news\\_march.html](http://www.niyagi-shiryounet.org/03/news/2011/2011news_march.html)）、蝦名裕一「東日本大震災における歴史資料保全活動」（『日本歴史』七五九号、二〇一一年八月）、佐藤大介「歴史遺産に未来を」（『歴史学研究』八八四号、二〇一一年一〇月）、天野真志「被災資料保全活動の現在」（『歴史評論』七四〇号、二〇一一年一二月）。もちろん、歴史資料レスキュー作業は、宮城だけで取り組まれているわけではない。一月二六日のフォーラムでは、宮城の他に、岩手、福島、山形、茨城などの取り組みについて報告があった。

**【付記2】** 宮城資料ネット事務局の皆さまに大変お世話になりました。天野真志氏には写真（写真7・8）を提供していただきました。心よりお礼申し上げます。なお、その他の写真は、筆者が二〇一一年一月二七日に撮影したものである。





【写真1】



【写真2】



【写真3】



【写真4】

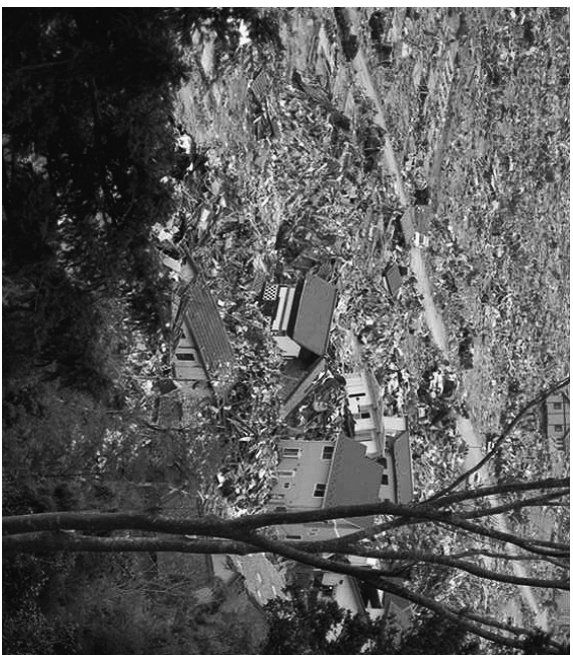




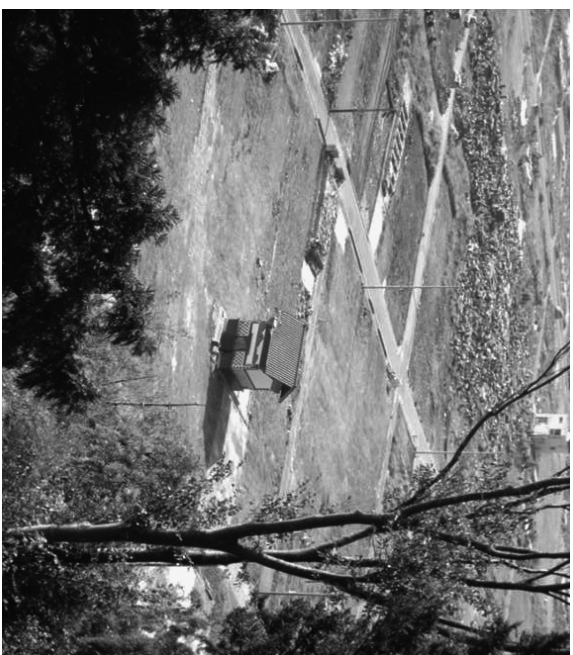
【写真5】



【写真6】



【写真7】 撮影 天野真志氏 2011年4月8日



【写真8】 撮影 天野真志氏 2011年11月27日





【写真9】



【写真10】



【写真11】



【写真12】



【写真13】



【写真14】



【写真15】



【写真16】

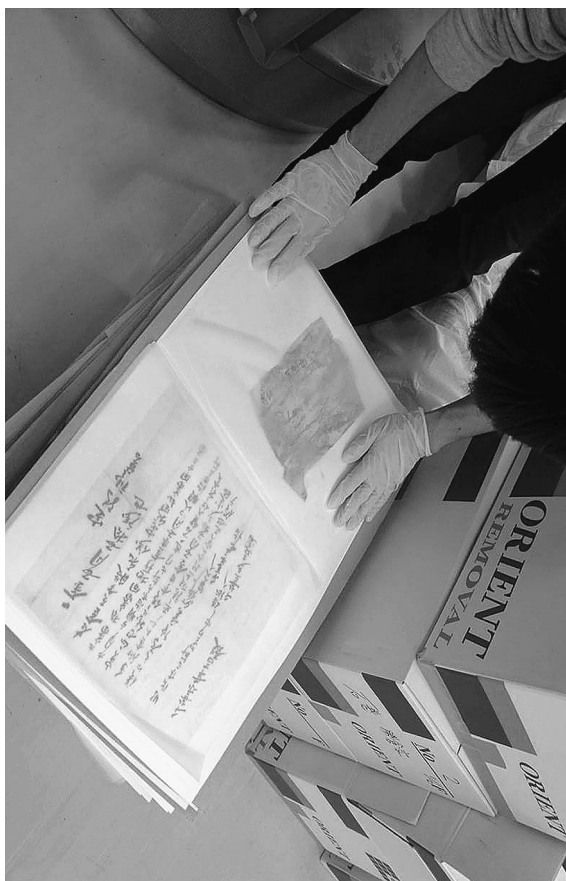




【写真17】



【写真18】



【写真19】



【写真20】



